読売新聞 2022年3月9日

五感を刺激する体験を

十人十色 20

子どもたちの今

乳幼児期の子どもとの関わり

2歳半のE君は、発する言葉が「パパ」「ママ」、大好きな飛行機を示す「ぴー」に限られるとのことで、お母さんが相談に来られました。

E君は生後8か月で、お父さんの仕事の都合で一緒に海外に行きました。ご両親ともに物静かな人で、飛行機のおもちゃで、ひとり機嫌よく遊ぶE君の横で読書をして過ごしていたそうです。相談室では、言葉は出ないものの、相談員が「おもちゃを片づけようね」と言うと棚に戻すことができ、おむつはしていましたが着替えも自分ででき、笑顔もよく見られました。

E君には「ことばの教室」に母子で週1、2日通ってもらい、ご両親には一緒に遊ぶ中でできるだけ話しかけてほしいとお願いしました。

3か月ほどたった頃、お母さんから「急に言葉が増えて、（教室に）楽しく通っています。毎日読み聞かせをしたら、絵本が大好きになって……」と報告を受けました。

相談に来られた時は「言葉が出ない」「こだわりがある」「ひとりが好き」といったことから発達障害も考えられました。しかし、E君は経験不足が原因であったといえます。

赤ちゃんの時に海外に行き、保護者以外に日本人の大人との関わりがほとんどなく、ひとり遊びが多かったことから、結果的に様々な機会を失い「言葉の遅れ」につながっていたと考えられます。

乳幼児期は遊びを通して五感を刺激する体験が大切です。目や耳が未発達な赤ちゃんは授乳や語りかけ、抱っこなどの刺激を通して五感を発達させます。そうした中で子どもは言葉や動きを覚えていきます。

親と子ども、他の大人と子ども、子ども同士といろんな人との関わりの中で、子どもは自分の気持ちを伝え、それを親が分かってくれたことの喜びを体験し、コミュニケーションの取り方を学んでいきます。

（発達支援塾アットスクール代表　鈴木正樹）

お母さんと一緒に遊ぶ子ども（写真と本文は関係ありません）